

「人工知能と高等教育の夢十夜」(飯吉 透)

本講演では、AI と高等教育の未来が多角的に考察され、特に生成 AI の登場による教育現場の変化と課題が詳細に論じられた。

まず、オンライン授業と生成 AI を活用した教育へのアプローチへの根本的な違いが取り上げられた。オンライン授業は対面授業の代替として行われ、目的は対面授業にできるだけ近づけることであつたのに対し、生成 AI は単なる代替手段ではなく、教育方法そのものを再構築する力を持つ点で本質的に異なる点が指摘され。これにより、生成 AI の教育利用においては、各大学や授業ごとに適切な対応が必要となり、現場の判断と責任が非常に重くなることが強調された。

次に、生成 AI が教育現場にもたらす具体的な影響が述べられた。特に、AI による個別指導や授業サポートの実現可能性が言及され、これらがすでに現実となりつつあることが指摘された。AI は、学生ごとの理解度に応じて柔軟に対応できるため、従来の一斉授業を超えた新しい教育形態を生み出す可能性を有しており、このような AI の活用が今後期待されると述べられた。

さらに、AI の進化が職業に与える影響についても触れられた。今後は高度専門職ですら仕事の一部が AI に代替される可能性があり、これは教育の在り方に大きな変革をもたらす。AI が契約書の確認作業を行いミスを最小限に抑えることで業務効率を劇的に向上させている企業等の法務における AI 活用サービスの TV CM の例が取り上げられ、このような変化が大学教育にも波及することは避けられず、教育内容や手法の見直しが急務であることが論じられた。

また、AI と人間の役割分担についても言及され、特に創造性や倫理観の育成が人間の役割として重要であることが述べられた。生成 AI は情報の処理には長けているが、人間のように創造的思考や倫理的判断を行うことはまだ限定的なので、これらを教育の中心に据えるべきであり、大学は知識を単に伝達する場ではなく、批判的思考や創造性を育む場として再定義されるべきだという提言がなされた。

生成 AI の活用による教育効果に関しては、“effect of tools”と“effect with tools”という Salomon と Perkins によって提唱された概念を用いて論じられた。“effect of tools”とは、ツールを使うことによって人間が新たな能力を獲得することであり、“effect with tools”とはツールを使っている時だけ成果が出せる状態を指す。教育においては、人間の能力を高めることが目的であるため、プロセスを重視し、ツールを使わずとも成果を出せる能力を育てることが重要であることが強調された。

講演の中盤では、生成 AI の活用に関する試行錯誤の重要性が説かれた。現場ごとに異なるニーズに対応するためには、多様な方法を試し、その中から最適解を見つける努力が必要であることが述べられた。また、生成 AI を効果的に活用することに

より、これまで以上に多くの学生が個別にサポートを受けられる環境を整えることが可能になることが強調された。

さらに講演の中では、生成 AI による教育の未来を、ChatGPT が夏目漱石の『夢十夜』風にユーモラスに描写したエピソードのあらすじが紹介された。AI 教員による授業や、インテリジェントな図書館、学生のメンタルケアを行う AI などの十話による未来の可能性が提示され、それぞれのエピソードに対して注釈やコメントが人間や AI の役割や立ち位置などを巡ってについて考察が加えられた。例えば、AI による試験監督の可能性について、AI が試験の最中に学生を支援する未来像が描かれた点を巡り、試験という概念そのものが変わる可能性があるという議論がなされた。

講演の終盤では、大学の役割を再考する必要性が強調された。大学は従来のように単位や学位の取得だけを目的とした場ではなく、学生が社会で活躍するための能力を身につける場であるべきだと主張された。最後に、個人の能力拡張を支援するためにテクノロジーを活用し、教育機関として限られたリソースをより有効に活用することが求められることが指摘され講演が締めくくられた。